

の諸方面が等しく重視されるべきであり、実際の人格の評定に際しては、教師および両親の観察所見並びに専門家の診断結果が総合的に考案されねばならない」と述べ、総合的な判断の重要性を指摘している。判別には重要な役割を果たすに違いない知能検査も、森氏によれば「もし、優秀児が可能性だけに基づいて定義されたとすれば、知能検査が主要な判別法となるであろう」が、森氏の優秀児の概念規定は、そうではなかった。従って、知能検査だけの判別は、第2原則からいっても、避けられねばならない筈である。ところが、少なくとも、著書の記述からの判断では、森氏による優秀児判別の実際は、知能検査だけに依拠しておるのである。すなわち、WISCによるIQが130以上の者が優秀児として森氏自身によって検出されているし、大阪市の「抜群知能優秀児」はIQが160以上のものとされ、その他の要因が考慮されたかどうかは不明である。もっとも「第2学級」出身者の場合のIQは示されていない。いずれにしても、優秀児の判別の実際にあたって、総合的な判断を重視する第2原則がどのように生かされているのか不明である。そういう意味で、私は、森氏が扱った優秀児は、実は、やはり、私がかつて名づけたところの「知能テスト的英才児」であったのではないかと理解するのである。日本における「知能テスト的英才児」の諸特性が、森氏によって、かなり詳細に明らかにされたということで、

十分学術的価値を認めるものである。

(3) 新しい優秀児像の創出を

これだけの労作をものにした著者であればこそ、私たちは、Termanを乗り越えた、新しい優秀児像、しかも日本的な優秀児像を提示してくれることを、森氏に期待したのである。そのためにも、最近の諸外国における優秀児研究の批判的摂取も、ときに必要なのではないだろうか。そういう意味で著者のあげている166の引用文献の中で、最近の外国文献の数が意外に少ないことが若干気になるわけである。GetzelsとJacksonの研究の紹介も、たしかに本文中にあるが、そうした創造性を強調した最近の優秀児研究に対する著者の見解を聞きたいし、また、ソビエトや東独など社会主義国で最近、活発に行なわれている能力研究との対比の上で、著者の研究を位置づけるとするならば、どうなるのか、私には関心がある。

(宮城教育大学 野呂 正)

参考文献

- (1) 岩田茂樹・野呂正：英才児，1969年，明治図書
- (2) 野呂 正：今日における英才教育とその問題点，「児童心理」1971年1月号
- (3) 野呂 正：優秀児の思考力「児童心理」1971年5月号

(1972・6・10) 原稿受付

村石昭三・天野清著：幼児の読み書き能力

—国立国語研究所報告 45—

(東京書籍株式会社 昭和47年6月刊，B5判 527ページ)

教育の世界には、さまざまな神話や伝説がつきものである。この世界では、ホンネとタテマエとのギャップが大きすぎるためであろうか。市販のテスト類の使用は教育ママの要求によるなどという言説は、その典型である。諸党派の利害にふれずにすまそうと思うなら、罪もないスケープゴートがどこかに求められることになるからだ。

幼児教育ともなると、神話はいっそう甚わだしくなる。就学前教育は、世界いたるところで、深く速い革新の波に洗われようとしている。Pinesが、その著書で「戦場(battleground)」という語を用いているように、新旧両陣営の対立はいよいよ尖鋭の度を加えつつある。我が国の幼児教育界も、例外ではない。

この対立を一口に要約するなら、伝統的な「情操教育」あるいは「社会性の教育」という主張に対して、革新派の側から提出される「知的教育」あるいは「教育の現代化」という主張のそれにあるといえよう。(これらの語はいずれも誤解の多いことばであり、筆者は好まないが、ここでは討論する余裕がない。興味ある読者は、拙著をみられたい) 前者は、いうまでもなく、幼児教育の独自性を強調し、後者は、いろいろなニュアンスはあるにしても、各種教育体系間の連続性を主張する側に傾く。その点で、幼児期の文字教育の問題が、論争の1つ

の焦点として浮かび上がってくるのである。

以上に加えて、日本の幼児教育界は、根深い体験主義的な体質をもっている。耳に快い言説は尊重され、口に苦い事実は無視されがちである。そこで、この対立にはいっそうの拍車がかかり、さまざまなムード論議、革新恐怖症、自己弁護、一方的自己主張、独断的改革論などを呼び起こし、神話と伝説も花盛りを迎えようとしている。

幼児の文字教育に関して、主な神話をとりあげればきりもない。曰く、「文字教育は、いわゆる知的教育の焦点である。」「幼稚園で文字教育を行なうと、差別と選別はいっそう促進される。」「幼児の知能は発達加速現象によって急速に向上し、文字の習得はきわめて容易となった。」「幼児が文字を覚えるのは、教育ママの教えこみによるものだ。」「漢字の練習は、ひらがなのそれよりもはるかに容易であり、幼児の知的認識を促す最良の手段となる。」「読み書きが平行していなければ、文字の習得に何の意味もない。幼児には書く力が不足しているから、文字を学ぶ真の能力はない。」「幼児は、主としてテレビを媒体として文字を学ぶ。」「……。

もちろん、政策的選択は、一応、事実認識とは別次元に属する。どのような事実があろうとも、それと正反対な方策を採用することも可能であろう。しかし、1つだ

け確かなのは、政策的選択が、しっかりした資料にもとづき、それを十分消化したうえでなされねばならないという点である。このような根を欠くところに、神話の生まれる理由がある。まして、自己に不利な資料に目をつぶり、あるいは誤った事実認識に即して選択が行なわれては論外というべきであろう。とすれば、この混乱を救うためには、よく確立された資料をもとにして、対立者のあいだに最低限のコンセンサスを創り、そこから出発していくよりほかに途はない。その意味で、本書は、測り知れない意義をもつ誠に貴重な労作である。

本書は、昭和42年来、施行とその解析に足かけ6年を費して国立国語研究所が行なった全国的規模による就学前児の読み書き能力の調査報告であり、その主要担当者であった村石昭三、天野清両氏により分担執筆された。B5判、500ページを越す大作であるため、その要点を紹介することさえ容易ではないが、調査の骨格は、おおむね次のようである。

被調査者は、まず、東北、東京、近畿の3地域から102に及ぶ幼稚園を2段無作為抽出し、そこからさらに抽出された4才児896名、5才児1497名の計2393名から成っている。これらの被調査者に対し、準備調査において綿密に検討された読み書き能力テストが行なわれた。

読みのテストとしては、清音46文字のみならず濁音、半濁音及び拗音、長音、拗長音、促音、助詞「は」「へ」の読みなど特殊音節の読みとり能力も含まれている。また、書きのテストとしては、清音、濁音、半濁音71文字の書きとり能力がテストされる。さらに、こうした読み書き能力を支える要因として、いわゆる家庭的背景条件、文化的環境要因、指導方針などがどう働いているかをみるために、被調査児の家庭に対して詳細なアンケート調査が行なわれている。

こうしてえられた結果は、誠に驚くべきものがあった。いま、著者らの要約にしたがって、その主要な知見をのべよう。

(1) 調査が行なわれたのは、今から4年半以前であるが、当時すでに、幼稚園児の多くは4才代から、何らかのかたちでひらがなを習得し始めている。

(2) 就学前の時期に、幼児は、清音、濁音、半濁音のみならず、拗音、長音、拗長音、促音、助詞などの特殊音節にまで読みの範囲を広げている。

(3) 就学の5か月以前に、63.9%の幼児が60文字以上を読むことができ、また、40%は、5種の特殊音節のうち少なくとも1種をマスターしている。

(4) 就学1か月以前の再調査結果では、60文字以上読める幼児の数は87.8%に増加し、5種の特殊音節中少なくとも1種をマスターしている比率も62.2%に達した(ただし、再調査の対象となったのは、都市部に在園している一部の者である)。

(5) したがって、4才台から始まる幼児のひらがな習得は、就学時までにはかなりの高水準に達する。

(6) 書きについては、就学5か月以前に、筆順も含めて21文字以上正しく書ける比率は59%である。

(7) 幼児のひらがなの書き習得状況は、読む能力ほど

ではないが、就学までに一般に予想されているよりは、はるかに高い水準に達していると判断される。

(8) 国立国語研究所が、昭和28年、小学校新入児を対象として行なった調査結果と比較検討すると、今日の幼児は、十数年前の幼児に比べ、文字習得の時期が一般に早まっている。

(9) しかし、一部には、この期に文字を習得しない幼児もある。したがって、児童間の個人差は以前より大きくなっていることが推測される。

Lewisによると、幼児の数能力、言語能力などは、ここ10年ほどのあいだにいわゆる先進国では上昇・加速の程度が著しいという。上の結果によると、日本も例外ではなく、最も上昇度の高い国の1つであるかもしれない。では、何が文字習得を規定している条件とみられるであろうか。

著者らの分析では、読み書き水準と相関の高い要因として、保育年数、性差、暦年齢などがあげられている。幼稚園で教育を受けた年数が長いほど、また、同一年齢群でも暦年齢の高いほど文字の習得度は高い。また、女児は男児に比して一般に習得度は高い。その他、一般に大都市地域ほど、また、家庭の階層的条件が高いほど習得水準は高い。

しかし、意想外にも、テレビとの接触時間の長い子どもは習得度が低い。逆に、絵本・漫画・物語り本などへの接触度は、プラス要因として作用しているようである。また、屋内遊びを好む子どもほど、習得度は高い。興味深いのは、兄弟があるばあい習得度はむしろ低下することである。

以上のような連関は、家庭及び幼稚園における教育・指導方針が幼児の文字習得を左右する要因であるかのように思わせる。しかし、家庭及び幼稚園へのアンケート調査の結果では、ワークブックその他を用いて積極的あるいはつめこみ式に文字教育を推進している親や幼稚園は例外的であった。このような方針をとる親は、むしろ習得水準の低い子どもに多く、また、幼稚園としては小都市や農村地域に偏る傾向がみられる。そうして、大部分の親は、幼児が自発的に文字を覚えるのに任せ、文字積木、絵本などの適当な文字環境を与え、必要に応じて援助をする程度に止まっている。したがって、大部分の幼児が4才台からいつとはなしに文字を覚えるという状況のなかで、それに遅れをとった子どもや地域において意図的・計画的な指導が試みられているのが実情であろう。ただし、大都市地域では、5才児になると4才代とはうらはらに急に幼稚園で文字指導に熱心になるという傾向もみられる。

このようにして、綿密な調査を重ねたにもかかわらず、ついに文字習得を促す決定的要因を発見することはできなかった。おそらく、上記のさまざまな諸要因が相互に加重しあい、文字への内発的動機づけを呼び起こし、自発的な文字習得へ進むとみるのが妥当であろうか。ただし、一方で、本調査の補充調査によって、4才代ですでにひらがな習得の基礎となる音節分解・抽出行為や文字についての知覚・識別機能が部分的に形成され始めてい

る事実が確認されている。このようなレディネスの獲得も、むろん無視すべきではない。

両氏は、さらに、第2部において、ひらがな習得水準の高い5才児41名を抽出し、これらについて6か月間の継続調査を行なって興味深い知見をみいだしている。これらの児童は、ひらがなのみならず漢字、数字、アルファベットなどさまざまな文字記号をかなりの程度に読みこなし、また、読める文字をほとんど書けるという子どももみられる。ひらがなの各字の読みを習得したのち、子どもは語や文の読みに移行し、さらに自発的に書く活動に興味を抱き始めるという経過がここで明らかにされている。その事例分析のあるものは、書く行為が幼児の想像の世界を具体的・日常的限界を超えてはるかに拡大していく有様を生き生きと描きだし、きわめて興味深いものがある。また、最後のまとめには、両氏の幼児の文字教育に対する綿密な検討が詳細に展開され、大いに示唆に富むが、いずれも簡単には要約できないのが残念である。

以上にうかがわれるように、本書はいたるところ、貴重な知見と緻密な考察に溢れ、第1級の著作と称するに過言ではない。特に、読み書き能力テストの信頼性を検討するために再テストを行なうなど、学問的に必要とされる事項について少しも労を惜しまない態度にはうたれ

るものがある。日本の学界ではとかく流行の意匠を追う研究のみが高く評価される傾向があるのに対して、この態度は誠に貴重といわねばならない。このように、息の長い本格的な資料の整備・収集が他分野でも広く行なわれることを望んでやまない。

むろん、本書は実態調査を主目的としているので、そのかぎりでの限界があるのは止むをえない。保育年数が有効条件であるらしくみえるにもかかわらず、幼稚園で特に専門的な教育が行なわれているとはみえない。このギャップはどう説明したらよいのであろうか。あるいは、Gibsonらが分析しているように、日本語のひらがな文字にもいく組かの弁別的特徴があるように思われるが、それと読みの難易との関係はどうなるだろうか。これらは、主として今後の課題であらう。

(お茶の水女子大学 藤永 保)

[註] Pines, M. 1966 *Revolution in learning: The years from birth to six*. Harper.

藤永 保 1967 幼児の心理と教育 フレーベル館
Lewis, M. M. 1965 *Language, thought and personality in infancy and childhood*. George, G. Harrap.

Gibson, E. J. 1965 *Learning to read*. *Science*, 148, 1066—1072